

ああ、相談業務

～ 彩人くんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

17

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

今回は非行について取り上げたいと思う。最近、非行は減って来た。少年院にはこどもたちが少なく、閉鎖になった少年院もあるくらいだ。このことについては最後に述べたいと思う。

家族

彩人君は中学2年生13歳。家族は母方祖母62歳、父親40歳、母親35歳、弟小学校5年生、妹小学校2年生の6人家族である。家は祖母の持ち物である一軒家。職業については、父親は土建業、母親はスナック勤務、祖母は清掃パートである。

北海道では、土建業の多くが冬場は除雪の仕事をしている。除雪は夜が多い。従って、子どもたちは夜祖母とともに過ごすことが多かった。

祖父とは母親が小学校低学年の時に離婚していて、音信不通である。父方祖父母は既に他界していた。

相談経過

彩人くん（以下本児）との出会いは6月の終わり、夏休みまで1か月を切ったところだった。北海道は初夏。町ではライラックが咲き乱れていた。

きっかけは学校での問題行動であった。とにかく学校での態度が悪いのだ。先生に対し、いちいち反抗的な言葉を吐き、授業妨害をする。弱い者いじめをするわけではないが、喧嘩も多い。そんな状況があって先生方も手を焼いていた。先生方とも話し合い、もしできたら一度相談室に連れてきてほしいと伝えていた。そんなある日、先生が本児を相談室に連れてきた。

先生と話すのも嫌がる子が、いきなりスクールカウンセラーと話せと言われて連れてこられたわけである。入ってくるなり、「なんでこんなところに来なくちゃいけないんだ！」と腹を立てて、文句を言う。「そうだよなあ、嫌だよなあ。来たくなかったよね。じゃ、授業に戻りたい？」と言うと「授業も面白かねえ、わかんねえし・・・」と

答えた。ここで「うるせえ！話しかけんな！」となった場合は、黙って見守るしかないし、物を蹴るとか何か暴力的なことが始まったら出て行ってもらうのだが、本児の答えはそういう形ではなかったのも、内心ほっとした。

そこで「授業に戻りたくないなら、此处で時間つぶししてみるか」と誘って、座るよう促した。本児はしぶしぶ座り、そっぽを向いた。話などしたくないという意思表示である。態度は反抗的だが、顔を見るとあどけなく、可愛げのある感じがした。もっとひどい子もいるが、まだこの子はそこまで落ちていないと感じた。しばらく黙って様子を見ながら、どうやって関係づくりをしようかと考えていたが、まあ、思いつくことを聴いてみようと思い、「〇〇君（名字）はゲームする？」と聞いた。今の子は殆どの子がゲームをしているので、ゲームの話だと乗りやすい。今の時代ならフォートナイトと言うところだろうが、当時はPSやスイッチなどはない時代である。ファミコンのゲームが主だった。

本児はちょっと気持ちを緩めたようで、『する』と答えてくれた。（以下『』は本児）「何のゲームするの？」と聞くと『××』と答えた。答えてくれたからにはしっかりつないでいかねばならない。「××か。流行ってるよね。バトルロイヤルゲームだね。友達とやってるの？」と言うと、ちょっと気持ちがこっちに向いた。こんなお婆さんがこのゲームを知っているのかと言う顔で筆者をみたのだ。そして短く『ああ』と言った。「ファミコンでやってるの？それともPCエンジン？」『PC』「君は仲間内では上手な方なの？」『まあね』「そうなんだ、すごいね。じゃあ仲間頼りにされちゃうね。下手な子いるとイラつく？」『ああ、だから、下手なやつとはやらない』「それは賢いね。上手い子何人くらいでやってるの？」『2・3人くらいかな。』・・・んな感じで話が少しずつ盛り上がっていった。ほかにどんなゲームをするのかとか、ゲーム以外にも好きなことはあるのかとか、ゲームの話から展開して繋げていった。本児の言葉数も少しずつ増えていく。

何とか授業時間一コマ分話をして、「また話しにおいでよ。君と話すの楽しいから」と言うと、『授業が面白くない時来るか』と言って帰って行った。

簡単に相談室での様子を先生に報告し、もし教室で授業妨害が酷くなったら、また相談室に送ってほしいと伝えた。その日はたまたま相談が少なかったのも、空いている時間を伝えておいた。

最初に来たのが2時間目だったが、給食後5時間目に再び送られてきた。

「あら、いらっしゃい。授業面白くなかったか」『ああ、あの先公嫌いだから』「え、誰？何の先生？」『社会』「△△先生か。ちょい口うるさいか」『それ、イチイチうるさい。声は小さいし。俺一番後ろだから聞こえない。聞こえないから聞こえないっていうと、「お前がうるさいから聞こえないんだ」って言いやがって……。俺はしゃべってねえのによ』「それは面白くなかったね。3, 4時間目は大丈夫だったの？」『3, 4時間目は体育だったから。』「体育は好きなの？」『バスケットだったから』「バスケットは得意？」『小学校の時少年団入ってた』「そっか。それじゃあうまいほうだね。」と、とっかかりの会話を繋げていき、少しずつ本題に入っていった。学校で反抗的になるのは何故かなどと聞いたって答えてくれる筈もないから、そういう話ではなく、家での様子を先に尋ねた。

「〇〇君は、家族って誰々いるの？」とか、「お父さんって何してるの？」とか「お父さん怖い？」「お母さんは？」などである。家族の情報をここで得ておこうと思ったからで、本児はこれらの質問についてはあまり抵抗せずに答えてくれた。そして、前述の家族のことがわかった。話の中で、父親が暴力的であること、母親はネグレクト気味であること、長男であるため、妹や弟の面倒を見させられること、祖母はいるが、足が悪く、十分なケアをして貰えてないことなどが分かった。家に帰ると食事の支度はしないが、それ以外のことを頼まれる。やらないと父親に殴られるので、やらざるを得ない。家にいたくないから、遅くまで友達とフラフラしているとも言っていた。そうい

う時の言い訳は「友達と勉強していた」だそうだ。父親も母親も中卒(高校中退)で学歴がないので、本児には高校に行けとうるさく言ってくるそうだ。

父親が殴るのは今では虐待なので、その話もしたが、もう少ししたら俺の方が勝てるから、それまで殴られないように上手く立ち回ろうと思っているという。中々頭は切れるようだ。

それでも殴られてよいわけではないから、もし殴られたら警察に行くのも一つだよとは伝えておいた。しかし、友達と町をふらついている関係で、警察と関わりたくはない様子だった。何か悪いこと、例えば万引きとかもしているのかもしれないと思った。そういう時はストレートに聴いてみるのも一つだ。早速聞いてみた。「友達と悪さもけっこうしているの？万引きとか？」『まあね』『よく捕まらないね』『そこは上手くやるさ』『頭いいんだね。でも、そういつも上手くはいかないよ。いつか捕まるかもね。お酒とたばこは？』『友達んち行くとやることはあるけど・・・これ、チクったりしねえよな？』『しないよ。でも酒、たばこ、薬は脳に悪いからね。知ってるよね？』『まあね』『未来のためには折角持ってる良い頭を悪くしないようにしないとね。まああなたの頭だからあなたの勝手ではあるけど・・・そういえば、将来なりたいものとかあるの？』『別に。』『そっか。好きなことで何か将来につながるものがあるといいね』『機械いじるのは好きだけど』『へえ、手器用なんだね。機械って車とかも？』『そう。車は親父の車、いじらしてもらう』などと話してまた5時間目を終え、教室に戻っていった。

学校での問題行動だけではなく、外でもいろいろやっている様子がうかがえ、これは警察沙汰になるのも時間の問題かもしれないと先生方と情報を共有していた。問題行動のことで保護者にいくら話をして、保護者は余り関心がない様子だったとのことだった。この話は先生方との集団守秘と言うことで外部には洩らさないよう伝えた。それを守ってもらえないと、本児との関係性にひびが入ってしまうからである。そして、このままだと

捕まるのを待つ方が話が速いかもと話していた。

この後も、7月に2回ほど相談室に来させられたが、本児とは雑談をして過ごした。関係はそう悪くはなく、学校の外での生活、主には喧嘩などの武勇伝を話してくれたりした。筆者はただ聞いて、「強いんだね」とか「すごいね」と言いながら聞いていた。「でもこのままだと捕まるよ」とはいっておいた。本児も『うまく逃げるさ』と強がっていた。

その後、夏休みにはいり、本児は夜間徘徊で補導された。一度は家に戻されたが、その後町で夜中に高校生ともめて喧嘩になり、警察の世話になった。こうしたことが繰り返され、9月には児童相談所に警察から送致され、児童相談所措置として結局児童自立支援施設(旧教護院)に入ることになった。

北海道内には児童自立支援施設が三つある。一つは大沼学園と言って、道南大沼にある学園である。二つ目は北海道家庭学校と言って、道北、遠軽にある。この二つは男子のみである。女子は北広島市にある向陽学園一つである。家庭学校以外は道立の施設である。家庭学校は日本でも珍しい民間運営の施設で、キリスト教系。敷地を鉄格子や塀、柵などで閉鎖隔離しない「解放処遇」形態をとっている。また、寮には寮監がいて、寮監家族と一緒に住む形をとっている。

児童自立支援施設に措置になる子は、虞犯行為(注)をくりかえしていたり、このままだともっと大きな犯罪を犯しかねない18歳未満の子(主に小中学生)で家庭ではしっかり管理監督が出来るそうもない子等である。本児は、何度か補導され、虞犯行為を繰り返していたが、まだ13歳であったことから、児童相談所から北海道家庭学校措置となった。期間は中学卒業までであった。学業については、家庭学校には遠軽町が遠軽中学校分校と東小学校分校を設置しており、本児は家庭学校内で中学の教育を受けられる。卒業はもともと在籍している中学校から卒業証書が出されることになる。卒業式には出られなくても、先生が卒業証書を持って施設まで来て渡してくれることも

多い。

施設での生活は、本児にとって楽しいものではなかった。勉強をしたり慣れない農作業をしたり、共同生活でもあるので、揉め事が起きないわけではない。揉め事を起こしては、指導員に叱られたりなだめられたりを繰り返していた。

一か月ほどたったある日、本児は施設から逃げ出した。冬場だと雪が深くて逃げだすには難しい田舎だが、夏場であれば、距離はあっても逃げることは可能だ。もともと開放施設なので、時々逃げる子がいる。他の施設でも逃げる子はいなのだ。

児童相談所から市に施設から抜け出し、車を盗んで逃げたという話が入り、どこまで逃げたのか、早く捕まってくると良いねなどと言っていた。車の運転を中学生がしていたら、警察に捕まるのも時間の問題と思っていた。盗んだ車が見つかったのは、なんと小樽だった。さてここからどこへ行ったのか？児童相談所や警察が探しに探した。結局本児が見つかったのはなんと沖縄であった。

本児は小樽からフェリーに乗り、本州に渡り、そこから更に、車を盗んだりしながら西へ移動し、お金も盗んで、沖縄まで行ってしまったのだった。

児童相談所の職員が沖縄で補導された本児を迎えに行き、どのように沖縄に行ったかが分かったそうだ。後で聞いてびっくりした。

本児は児童相談所に戻され、少年院に入るのかと思ったが、家庭学校の指導員の先生が迎えに来て話し合いをし、もう一度家庭学校で頑張るという話になって戻っていった。その後は冬になったこともあり、抜け出すこともなく、3年生になった。夏場はまた逃げ出すかもしれないと、施設でも気を付けてみていたが、本児はそういうことは無く、結局卒業までその施設で頑張った。勉強をしっかり見てもらえたことで学力が付き、本児は高校に行きたいと思うようになった。車や機械が好きだし、手先もそこそこ器用だしということで、工業高校に進学することとなった。施設の指導員の方たちが、勧めてくれたこともあり、工業高校の方でも快く受け入れてくれた。

高校入学前に、筆者も本児と逢う機会があった。

顔つきも良く、精悍な感じになっていた。

高校に進学して、悪い仲間とまたつるんだろくなことにならないのではと案じていた。案の定悪い仲間とつるんだりはしていた。その後5年ほど経って、20歳になっていた本児が喧嘩で傷害事件を起こして捕まったという記事を新聞で見かけた。地方紙の隅に載った小さな記事だった。残念に思ったが、その後は新聞記事になることもなく時間が過ぎた。その時の事件では、保護観察処分になったそうだ。しばらくして、風の便りに、結婚して子どもが生まれたという話を聞いた。家庭を持ってからは今も真面目に働いている。

まとめ

非行少年の全てが、何度もつかまって、最終的に、やくざやチンピラになっていくわけではない。いきがって、馬鹿なことを繰り返し、完璧に犯罪者となって落ちるところまで落ちる子もいるが、あるところで踏みとどまり、その後は何とか普通の生活をしていく子もいる。

少年院を出た子の中にも、更生し頑張っている子、犯罪を繰り返している子と二手に分かれる。その境目はいったい何だろうか？やはり、そこには人が絡む。本ケースのように、良い人と巡り会えたことで、結婚し、家庭を築き、家庭のために頑張れるようになる子もいる。一方で、施設や少年院を出た後も、人に恵まれず、結局は悪い仲間との関係を切れずにそのままずるずると悪の道に行ってしまう子もいるのだ。

先日関東で死体遺棄及び損壊の罪で捕まった元俳優は、小学校の頃から子役として活躍し、俳優としてもそこそこ売れていたのにも関わらず、いつの間にか、落ちるところまで落ちていた。

子どもが悪い道に行ってしまうかどうかは、基本的には家庭の問題が大きい。本ケースでも、父母の愛情が十分あれば、施設に行かなくても済んだだろう。施設から出てきたときに、家庭が暖かく迎え、サポートしてくれていたら、その後の傷害事件にも結び付かなかったかもしれない。高校でよい友達に出会い、良い先生に出会い、きちん

と就職して、真面目に働くことで、彼女とも出会い、良い家庭を築く、という人生になれたかもしれない。本ケースでは、一度傷害事件を起こしてはしまったが、その後良い彼女に出会い、家庭を持ち、真面目に過ごせるようになったのは、何よりであった。彼女の力によるところは大きいだろう。スクールカウンセラーとして、出来ることは少しもなかったし、わずかな間の関りでしかなかったが、あどけなさの残った最初の出会いの時の彼の顔を今も時々思い出し、あの時何かできたことは無かったかと考える。出来るとしたら、父母に会って本児への関わり方を変えてもらうことだったかもしれない。しかし、非協力的な保護者が面談に来てくれることは期待できない。時と出会いが解決してくれることもある。本ケースの場合も、結局時とともに変化し、人との出会いで変わっていったケースだと思う。

注：虞犯行為とは、保護者の監督に服しない性癖（深夜徘徊や無断外泊）、正当な理由がなく家庭に寄り付かない（家出）、犯罪性のある人や不道徳な人と交際したりいかげわしい場所への出入り（暴走族、暴力団への加入）、或いは自己また

は他人の徳性を害する行為をする性癖がある（援助交際や風俗店勤務）のいずれか少なくとも一つに該当し、「将来、罪を犯しまたは刑罰法令に触れる恐れのある行為」のことである。

参考：

最近の少年院の入所者数について

2024年2月現在の日本全国の少年院総入所者数は1640人（男1482、女158）である。10年前2014年の2月では2873人（男2596、女277）であった。これが15年前だと3565人（男3181、女384）である。年々減ってきているのがわかると思う。筆者の住んでいる千歳市には、北海少年院と紫明女子学院の二つの少年院がある。北海少年院は男子のみで定員150名。おやじ狩りなどが盛んだったころは満員だったが、今は今年の2月現在62名だけ収容されている。また、紫明女子学院は定員56名で同じく今年2月現在7名のみの収容である。北海道には他に月形と帯広に少年院があったが、月形は2019年に、帯広は2022年に閉院となった。いずれも入所者が少なくなったからと老朽化が理由である。北海道のみならず、全国的に少子化と非行少年の減少に伴い閉院が進んでいる。